

# 一つしかない地球への自覚

2021年12月6日

学長 田林 暁一

世界の人口は現在、約 77 億人であり、この人口は地球上に生息可能な上限人口の 300 億人以下であるが、全ての人々が米国と同水準の生活を送ると仮定した場合には既に、定員オーバーとなっているとする報告もある。

2019 年の世界の平均寿命は 73.3 歳（男性：70.8 歳、女性：75.9 歳）で、最長 120 歳までは生存可能とされている。ネズミの平均寿命は 3.5 年と短い、その間に人と同様の動脈硬化、心臓血管障害、脳の活動低下の変化を呈すると言われている。本川達雄は著書「ゾウの時間、ネズミの時間」の中で、ゾウでもネズミでも哺乳類は一生のうちで心臓が 20 億回鼓動を打つと寿命が尽きると述べている。この結果は人にも当てはまると述べており、心拍数を 70/分として計算すると 54.4 年で、上述の平均寿命より短い結果であった。

人間と他の哺乳類の寿命が何故異なるかはまだ明確にされていないが、性成熟年齢の関係からの分析は興味深い。アカゲザル、ヒヒ、ゴリラ、チンパンジーの性成熟年齢はそれぞれ 4 歳、5 歳、8 歳、9 歳であり、それとほぼ相関して最大寿命は延長し、それぞれ 30 歳、35 歳、40 歳、45 歳で、一方、人間の性成熟年齢は約 14 歳と他の哺乳動物より遅く、それに伴って最大寿命は 90 歳となると報告されている。生物の一生は生物期→生殖期→後生殖期の 3 時期に区分されるが、人間の特徴は後生殖期が他の生物に比較して非常に長い事である。他の生物は子孫を残すことが一生の最大の使命で、鮭の様に子孫を残した後、直ぐに一生を終えるものもある。この様な他の生物には見られないような人間の後生殖期の延長は高齢化社会に結びつく大きな要因となる。

縄文時代の平均寿命は約 28 歳であり、その後、種々の要因で延びてきたが、その変化に果たすべき大きな期待が含まれており、神が我々に下した命題の様にも感じられる。他の生物と共存している地球において長い寿命を嵩にきて我が物顔に変化を加え、変貌させるのは神の命題に反しているように思える。

温暖化現象をはじめとする地球環境に関する種々の問題がようやく世界的レベルで本格的に話し合われるようになってきたのは朗報で、更に今年の 10 月 5 日に真鍋叔郎さんが地球の気候変動をコンピューターで予測する方法を開発し、温暖化研究の基礎を築いた功績でノーベル物理学賞を受章されたのは上述の問題解決の大きな弾みとなるように思われる。いずれにしても「一つしかない地球」への多くの人の自覚が望まれる。